

P36-3 当院のミールラウンドを通じてリハビリ栄養をスタッフ間に意識づけることができた5年間の経過報告

医療法人 清仁会 水無瀬病院 看護部 渡邊加代子

共同演者：山田 由佳、五十嵐大二、森本 美和

【目的】当院は地域に密着した中核病院であり、在宅部門との連携も多かったがリハビリ栄養に関する知識は低く、実質的な取り組みは行っていなかった。5年前、リハビリテーション（以下リハ）医師の配属により、ミールラウンドのチーム（以下チーム）を発足させ、チームを通じてリハ栄養の普及を開始した。

【方法】週1回チームで集まり、食事の観察で摂取量、摂食・嚥下の状況、食欲、食事の満足感、食事量のバランス、姿勢、食具、介助方法等の環境調整を実施した。体重や採血、InBody測定での栄養状態の評価や栄養の勉強会や啓蒙活動、適宜チーム活動の見直しを行った。

【結果】チーム発足前、食事の調整は担当看護師のみで行っていたが、発足後、医師・看護部・リハ・栄養士を含めた話し合いをすることで、活動量や嗜好等を踏まえた食事量の提供、間食や分割食で栄養補助をすることで、食事の質が向上し、栄養状態が改善していった。また、カンファレンスの中で、低栄養・低体重・高度肥満の栄養改善について話し合い、スタッフ間のリハ栄養に対する意識づけができるようになった。栄養不良の患者さまがいる場合、チームに相談する流れが定着し、情報が集約され早期に栄養改善の介入が可能となった。また、急性期病棟はNSTを導入しており、カルテ内容の統一を図り、回リハ病棟に転棟した際、スムーズに情報共有された。

【考察】当院は地域に密着した中核病院のため、大半は高齢の患者様が多く、サルコペニアやフレイルにより要介護者や低栄養の患者が多く在宅復帰が困難な事例が多かった。今回のリハ栄養のサポートをすることで、栄養状態の改善が図られ、スタッフ間の意識やリハ効果も高まっていった。まだまだ当院のリハビリ栄養は発展途上の段階である。今後は、リハ栄養を組み込んだケアを地域や家庭に還元し、超高齢化社会に貢献していきたい。